

■**角田浩々歌客** 文芸時評家。大阪の論壇・文壇で重きを成し、東の坪内逍遙と並び称されたが早世した。
かくだこうこうかきやく
戊辰戦争終・1869＝ 駿河国富士郡大宮町の旧家で、旧静岡藩士角田秋金の子に生まれる。本名は角田勤一郎。
佐野天声の実兄である。角田櫻岳は祖父。中村春二は従兄弟。山梨稲川は曾祖父。

明治6年政変 1873＝ 4歳：

幼少時代は石の採集を趣味とし、近郊の山野に出歩いた。

大久保暗殺・1878＝ **9歳**：

明治14年政変1881＝12歳：

郷里の中村秋香に学んだ後、中村が保証人となり、

帝国大学始・1886＝17歳：上京して慶應義塾正科に入学、
国民之友始・1887＝**18歳**：

漢詩を学んで、中国詩文に詳しくなり、金尾文淵堂から詩の作品を発表するなどするうち、

帝国憲法発布1889＝20歳：

帝国議会始・1890＝21歳：この年民友社から「帰省」を刊行し評価された刊行した5つ年上の宮崎湖処子が富士登山すべく角田邸を訪れ、
足尾鉾毒始・1891＝22歳：慶應義塾大学部文学科に進む。不二行者の筆名で、{国民新聞}に「白雲を読む」を寄稿しているように、**宮崎湖処子の影響を受け**、
この間、北欧から世界的な文学者が登場、{国民新聞}へ投稿し、北欧文学を日本に最も早く紹介、

日清戦争始・1894＝25歳：この年、国木田独歩が民友社に入り、日清戦争に、{国民新聞}の記者として従軍している。
白馬会・・・1896＝**27歳**：卒業するとともに、**徳富蘇峰**の設立した**言論団体**の民友社に入り、**宮崎湖処子が{国民新聞}に連載した小説「人寰」の終了を引き継ぐ形で、唯一の長編小説「老天」を連載、3回で中断、**
***宮崎湖処子(八面楼主人)に従い、{国民之友}に、浩々而歌閣主の名で、「鹿子紋」「人殺し」「たかせ川」の掲載を始めて、文芸時評家として登場、やがて、宮崎が退場し、単独で担当するようになる。**

八幡製鉄始・1897＝28歳：***宮崎湖処子(八面楼主人)に従い、{国民之友}に、浩々而歌閣主の名で、「鹿子紋」「人殺し」「たかせ川」の掲載を始めて、文芸時評家として登場、やがて、宮崎が退場し、単独で担当するようになる。**

子規句歌革新1898＝29歳：小説家としての道が開けないでいた2つ下の国木田独歩ら後進を育てながら、**{国民之友}に、「老天」改め「石ふみ」を連載完結するも評価されず、{国民之友}も廃刊となって、民友社を去り、**
***大阪朝日新聞社に招かれて時評を担当。大阪では当時、{大阪毎日新聞}に文学欄があり、{大阪朝日新聞}は文学欄を廃止していたが、「月曜文壇」の創設と共に、不二行者、出門一笑の名で、文学に関する筆を執った。以後、新聞社ごとに号や筆名を使い分けて執筆、思想は穏健、性格は温厚と評されていたが、しばしば象徴詩論争を起こすこともあった。**

ピョートル/国産化・1900＝31歳：単行本「詩国小観」の冒頭に、「石ふみ」を収録するも、やはり評価されなかった。この年{大阪朝日新聞}紙上に発表した「讃岐名勝」や、故郷の「富士の巻狩」を代表に、若い頃かた紀行文を多く書いている。また、新聞社に勤務する傍ら、文芸評論あるいは詩文を発表していたことから、薄田泣菫らによる文芸雑誌{小天地}の主宰人となり、永井荷風、泉鏡花、与謝野鉄幹、与謝野晶子らの執筆を得て関西文学のムーブメントを作り、東京の{明星}と共に旺盛を誇ることになる。{国民新聞}以前から、フィンランドの「カレワラ」や、ブランドス、ヤコブセンら自然主義・リアリズムの作家たちのデンマーク文学などの紹介に努めてきたのに続いて、**「剣南の名で{読売新聞}の文芸時評{風頭語}でチャーホフのことを、日本に初めて紹介、**

田中正造直訴1901＝32歳：「出門一笑」、
教科書疑獄・1902＝33歳：告天子の名で{大阪朝日新聞}に「西文消息」、
日比谷公園・1903＝34歳：愛天生の名で、{帝国文学}に「海外騒壇」としてロシア文学を論じ、チャーホフを位置づけている。
日露戦争始・1904＝35歳：母校慶應義塾の旧塾歌を作詞。{大阪朝日新聞}に、**「英訳からではあったが、チャーホフの小説のわが国初となる「大椿事(原題は事件)」を掲載すると、瀬沼夏葉はじめ、その作品の翻訳が続くなか、チャーホフが死去、{読売新聞}の{警露集}に、剣南の名で回顧。日露戦争が始まると、ロシア語通の二葉亭四迷が大阪朝日新聞社に迎えられるのである。**

日露戦争終・1905＝**36歳**：「理趣情景」。**「退社し、{大阪毎日新聞}に入って編集長となり、**
硯友社系の作家や詩人との付き合いも多くなり、真山青果の連載小説を{大阪毎日新聞}に掲載したり、{青眼白眼}に尾崎紅葉、幸田露伴に関する評論を行った。

韓国反日暴動1907＝38歳：ショーペンハウエル 著、山下二郎・庄直一 訳「恋愛と芸術と天才と」の編集にあたった。「鷗心録」、
アラビヤ 創刊・ 1908＝39歳：翌年にかけて社会部長、
伊藤博文暗殺1909＝40歳：ロシアに派遣されるも肺結核になった二葉亭四迷が帰国の船中で死去。
韓国併合・・・1910＝41歳：鈍右衛門の名で、大阪人についての研究「権右衛門と善右衛門」を長期連載し好評、
大逆事件判決1911＝42歳：再び社会部長、
明治天皇没・1912＝43歳：**「{東京日日新聞}の初代学芸部長に招かれて、13年余の大阪生活を終わるが、自ら「大阪見物」で回顧したように、大阪の魅力を語る一方、関西文学への貢献は著しかったが、**

大正政変・・・1913＝44歳：「漫遊人国記」、
第一次大戦始1914＝**45歳**：

この間、アングラ作家松崎天民を食客として世話し、新聞社へ就職の面倒をみたりしている。

民本主義・・・1916＝47歳：**「没した。」**